



Title	人工股関節全置換術患者評価尺度Oxford Hip Score日本語版の妥当性・反応性および患者QOL縦断調査
Author(s)	上杉, 裕子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49863">https://hdl.handle.net/11094/49863</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【8】

氏 名	うえ すぎ ゆう こ 上 杉 裕 子
博士の専攻分野の名称	博 士（看護学）
学 位 記 番 号	第 2 2 8 2 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学 位 論 文 名	人工股関節全置換術患者評価尺度 Oxford Hip Score 日本語版の妥当性・ 反応性および患者 QOL 縦断調査
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 牧本 清子 (副査) 教 授 早川 和夫 教 授 梅下 浩司

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では縦断調査における人工股関節全置換術（THA）患者評価尺度Oxford hip score（OHS）日本語版の妥当性・反応性を検証することと、THA患者のQOL尺度の反応性および年齢による変化の特徴を明らかにすることを目的とした。

THA患者に術前・術後6ヶ月・12ヶ月にOHS、包括的健康関連QOL尺度SF-36v2と和式生活に関連した股関節の深い屈曲を伴う動作（足指の爪切り・和式トイレ・正座）からなる質問紙調査を行った。

1. OHS日本語版の妥当性・反応性

術後6ヶ月では108名（男性22、女性86、平均年齢58.4歳）から回答が得られた。OHSのすべての項目で有意な改善がみられ、効果量も高く、反応性が検証された。OHSとSF-36v2の身体面との間に0.6から0.76の相関があり、併存妥当性が確立された。

2. 縦断調査におけるQOL尺度の反応性の検証

術後12ヶ月まで追跡できたのは85名（男性17、女性68、平均年齢58.7歳）であった。

術後7・12ヶ月の6ヶ月間でQOLが大きく改善し、その後12ヶ月まで緩やかな改善がみられ、OHS、SF-36v2の反応性が検証された。しかしSF-36v2身体機能（PF）、日常役割機能（身体）(RP) は国民標準値より低かった。また、深い屈曲を伴う動作の「正座」は効果量が低い傾向にあった。

3. THA患者の年齢によるQOLの変化

THA患者の年齢は20・80歳と幅が広いため、年齢による術前術後の変化を検討した。患者の年齢を58歳以下（若年群）と59歳以上（高齢群）の2群間比較した結果、術前にはどの項目も有意差は認められなかったが、術後6ヶ月の日常役割機能（身体）(RP) は若年群のほうが有意に改善していた。また術後12ヶ月において、深い屈曲を伴う動作である「足指の爪切り」、「和式トイレ」、「正座」は有意に高齢群が悪かった。

本研究結果よりOHS日本語版の妥当性・反応性が認められた。またTHA患者のQOLは術前から術後に改善するが、身体面は術後1年を経過しても国民標準値に達しないこと、高齢THA患者の深い屈曲を伴う動作の回復は若年THA患者に比較して悪いことが明らかとなった。今後の課題として術後1年を超えての患者の調査とともに、THA患者の評価にはOHSに含まれていない深い屈曲を伴う動作項目を追加する必要性が示唆された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は縦断調査における人工股関節全置換術（THA）患者評価尺度Oxford hip score（OHS）日本語版の妥当性・反応性を検証することと、THA患者のQOL尺度の反応性および年齢による変化の特徴を明らかにすることを目的としたものである。

THA患者に術前・術後6ヶ月・12ヶ月にOHS、包括的健康関連QOL尺度SF-36v2と和式生活に関連した股関節の深い屈曲を伴う動作（足指の爪切り・和式トイレ 正座）からなる質問紙調査を行った。その結果下記が明らかとなった。

1. OHS日本語版の妥当性・反応性

術後6ヶ月では108名（男性22、女性86、平均年齢58.4歳）から回答が得られた。OHSのすべての項目で有意な改善がみられ、効果量も高く、反応性が検証された。OHSとSF-36v2の身体面との間に0.6から0.76の相関があり、併存妥当性が確立された。

2. 縦断調査におけるQOL尺度の反応性の検証

術後12ヶ月まで追跡できたのは85名（男性17、女性68、平均年齢58.7歳）であった。術後7・12ヶ月の6ヶ月間でQOLが大きく改善し、その後12ヶ月まで緩やかな改善がみられ、OHS、SF-36v2の反応性が検証された。しかしSF-36v2身体機能（PF）、日常役割機能（身体）(RP) は国民標準値より低かった。また、深い屈曲を伴う動作の「正座」は効果量が低い傾向にあった。

3. THA患者の年齢によるQOLの変化

THA患者の年齢は20・80歳と幅が広いため、年齢による術前術後の変化を検討した。患者の年齢を58歳以下（若年群）と59歳以上（高齢群）の2群間比較した結果、術前にはどの項目も有意差は認められなかったが、術後6ヶ月の日常役割機能（身体）(RP) は若年群のほうが有意に改善していた。また術後12ヶ月において、深い屈曲を伴う動作である「足指の爪切り」、「和式トイレ」、「正座」は有意に高齢群が悪かった。

本研究結果よりOHS日本語版の妥当性・反応性が認められた。またTHA患者のQOLは術前から術後に改善するが、身体面は術後1年を経過しても国民標準値に達しないこと、

高齢THA患者の深い屈曲を伴う動作の回復は若年THA患者に比較して悪いことが明らかとなった。今後の課題として術後1年を超えての患者の調査とともに、THA患者の評価にはOHSに含まれていない深い屈曲を伴う動作項目を追加する必要性が示唆された。

我が国では人口の高齢化に伴い、THA患者の増加が見込まれ、患者QOLについて検討した本論文は看護学博士の学位を授与するに値するものである。